

朝鮮語海外言語文化研修のこれまでとこれから

石坂 浩一

はじめに

日本社会では近代以降、朝鮮を対等な隣国として認識してこなかった（これなかった）歴史が久しく続いてきた。日本は朝鮮半島を日清戦争で戦場とし、日露戦争でも勢力争いの対象として認識し、やがて1910年から45年まで植民地として支配したのであった。そうした時代、朝鮮語を学ぶべき、知るべきものとして考えた日本人は皆無に等しかった。

それから比べると、21世紀の今日、朝鮮半島は南北分断の困難の下にあるとはいえ、同じ歴史が繰り返されることは考えにくい。ただ、日本社会で朝鮮語を進んで学ぼうとする動きが認められてきたのは1970年代以降のことにすぎない。今日、日本社会が内向きの雰囲気にとらわれる中、いわゆる「嫌韓流」という朝鮮半島全体への侮蔑の感情が顕在化している。日本社会の底流には常にかつての支配の記憶、侮蔑の記憶があり、ことあるごとにそれはよみがえる危険性があると考えなければならぬだろう。

よりよい関係を生み出すには、よい

出会うの機会を増やしていくことが欠かせない。2008年度から正規科目化される朝鮮語海外言語文化研修は、スキルを高めるにとどまらず、相互理解を深め、言葉ができるようになりたいと願う気持を培うことができるはずだ。彼の地の人びとと出会うことは、スキルを向上させたいと願う動機付けの一番の機会だからである。以下で、これまでの実績を整理し、今後の課題を簡単にまとめてみよう。

1. これまでの概要

2000年を前後するころから、立教大学では延世大学、聖公会大学との交換留学制度が次第に定着するとともに、交換留学派遣者をはじめとして韓国で短期間実地に言葉を学びたいという声が多く出るようになった。また、2000年代に入って、従来少なかった朝鮮語選択者も増加してきた。交換留学の事前準備として韓国でしばらく学びたいのだが、どこに行けばいいかという質問を受けて、私は後述するカナタ韓国語学院を勧めてきた。だが、専任教員がおらず韓国での短期研修を実現する

第1回	2005年3月6日～22日	カナタ韓国語学院	17名
第2回	2005年8月7日～23日	聖公会大学	17名
第3回	2006年3月11日～27日	カナタ韓国語学院	10名
第4回	2006年8月5日～22日	聖公会大学	16名
第5回	2007年3月9日～23日	カナタ韓国語学院	18名
第6回	2007年8月4日～21日	聖公会大学	10名
第7回	2008年3月8日～24日	カナタ韓国語学院	18名（予定）

ことはできなかった。

立教大学では朝鮮語の専任教員が2004年度に着任して以来、春と夏に韓国における語学研修に取り組んできた。実行形態は、朝鮮語専任教員である石坂個人の行なう事業として、全カリの承認のもとに催行した。日程と研修派遣先、参加者数をまとめると前頁下段の表の通りである。

2. 研修機関

ここで、研修機関について説明をしたい。韓国において海外在住者向け語学研修は、延世大学を嚆矢とするが、近年多くの大学でそうした教育機関を設けるようになった。ほとんどの機関で、夏休みなどの短期研修は3週間で設定されている。だが、初めて韓国で、あるいは外国で暮らすという学生たちに3週間はそれなりの負担であることが否めない。カナタ韓国語学院はそうした中で唯一、2週間コースを設定している。

カナタ韓国語学院はもともと延世大学で教育に当たっていた人たちが設立した専門学校で、少人数のすぐれた教育をすることで知られている。フェリス女学院大学は正規科目としてここで夏休み研修を実施している。

春休みはカナタ韓国語学院を選択し

たが、夏休みは聖公会であり、すでに交流が積み重ねられていて、韓国では小規模ながらすぐれた教授陣で評価を高めている聖公会大学を選択した。これはひとつの偶然だが、最初の夏休み研修の機関を検討していた時期、聖公会大学でアジア言語文化教育センターという組織を新たに設立したという話を聞いた。夏休みの暑い時期に3週間の滞在はつらいと思っていた矢先だったので、聖公会大学に2週間コースを提案し、受け入れていただいたのである。聖公会大学には日本学科があって日本人、日本社会に関心が高い学生が少なくない。また、全学の学生数が約3000名と小規模なため、直接学生と出会う機会を設けやすく、交換留学をはじめとした本学との相互交流にも貢献できると思われた。

3. 研修の成果

参加者数はこれまでのところ、春と夏のどちらが多いということもなく、同様のレベルで推移している。参加者の感想をたずねると反応はとて面白い。以下に第4回(聖公会大学)と第5回(カナタ韓国語学院)の研修後のアンケート結果を紹介しよう。

研修全体に対する評価が肯定的であるとともに、期間や進度についても肯

第4回 2006.8 アンケート回収9

期間	長かった0	ちょうどいい6	短い3
進度	速かった1	ちょうどいい8	遅い0
研修評価	よかった9	まあまあ0	物足りない0

第5回 2007.3 アンケート回収17

期間	長かった0	ちょうどいい16	短い1
速度	速い0	ちょうどいい16	遅い1
研修評価	よかった16	まあまあ1	物足りない0

定的評価をしている。現時点で2週間の研修期間設定は適切だと確認できよう。韓国の学生たちとの交流についても満足度は高い。複数回参加した学生もいるが、ふたつの学習機関でそれぞれのおよそがあり、一方だけがすぐれているとの評価の片寄りはこれまでのところ見られない。

研修を終えた学生は、朝鮮語学習に一層意欲を示してきた。研修の目に見える成果としては、以下のような点が指摘できる。まず、交換留学申請者が研修経験者から多く輩出していることである。また、ハングル能力検定試験を受験して合格するのも研修経験者が多く、ある程度高いレベルであれば研修に参加していない学生はいないといっても過言ではないほどである。

さらに、朝鮮語学習に限らず研修参加者が積極的、目的意識的な姿勢で臨んでいるように感じることもある。担当者の欲目かもしれないが、2007年度に総合科目「朝鮮半島の日本」を担当した際にこのことを感じた。

4. 実行と課題

①正規科目の授業内容

2単位の正規科目としての朝鮮語海



外言語文化研修は、2008年度以降、夏休みに聖公会大学で、以下のような内容で実施する予定である。

語学研修に関連する時間(48時間)は正規授業44時間(午前中に4時間ずつ11日)とコミュニケーション体験2回計4時間からなる。コミュニケーション体験は日本語学習経験のない韓国人学生を聖公会大学側に紹介してもらい、立教の数名の学生とグループでコミュニケーションをするもので、学んだ言葉を使ってみるというものである。自分が口にしたことがわかってもらえるという楽しさを知る体験にほかならない。2006年以降、これを実行してきたが、相手を目の前にして意思を通じさせる体験をすることは、自分の学習成果を確認することで、それなりにできるという自信をつける場にもなる。

2単位の時間数としては基本的にはこれでよいが、せっかく韓国に来たからには視野を広げる機会を持つという趣旨で、文化研修に関連する時間(12時間)も設定している。フィールドワーク(8時間)はこれまで、古代から近代までの歴史が深く刻まれている江華島見学が恒例である。ほかに2007年に試みた課題解決型フィールドワーク(2時間、グループ別に学習水準に合わせた課題を与え、それを解決して大学に戻ってくるフィールドワーク)と講義「現代韓国事情」(2時間、これだけは日本語)を組み込んでいく。

②クラス編成の課題と充実した学習に向けて

これまでのところ、夏休みの聖公会大学における研修は、2006年に参加者16名で3クラスを設定できた。しかし、2007年は参加者が10名にとどまり2クラスしか設定できなかった。今後、正規科目化すれば参加者はある程度ふえるだろうが、それによりレベル設定を多様にするができるはずである。



2007年夏の朝鮮語海外言語文化研修

文 珍瑛

だが同時に、初歩的レベルの参加者がどうしても多くなり、基礎レベルのクラスの人数が多くなる傾向があるのは、これまでの事例からいって否定しがたいことである。基本的に1クラスの最大人員は8名と考えてきたが、この線を今後も守りながら質の高い研修ができるように、学生たちに積極的参加を促していきたい。

幸い、聖公会大学の側でも独自のテキストを編成し、組織を拡充して2007年度後半からは、短期研修だけでなく、平常時からアジア圏の学習者を受け入れ、教育を実施するようになっていく。受入先機関と協力しつつ、ともに海外研修を発展させていきたい。

末尾ながら聖公会大学およびカナタ韓国語学院のこれまでご協力くださった皆様に心から感謝申し上げたい。

いしざか こういち
(本学経済学部准教授)

毎年、春と夏休みに行われている語学研修に、昨年夏に初めて参加することになった。8月4日、成田空港で待ち合わせをして、一行は韓国行きの飛行機に乗った。学生たちのわくわくしている気持ちが私にも伝わり、いつも利用している空港がまた違う感じがした。韓国の空港には、聖公会大学の方が迎えに来てくれた。毎回の語学研修に学生を引率している石坂先生がすべてを用意してくれたので、学生たちと無事に宿泊先に着くことができた。宿泊先は聖公会大学の寮で、学校の近くにあるマンションだった。約2週間の滞在には何の不便もなく過ごすことができるようにすべてが備えられてあった。

授業は、聖公会大学のアジア言語文化センターで行われた。今度は桃山学院大学の学生も参加したので、クラスは入門、初級、中級に分かれて、ベテランの先生たちが担当した。授業はすべて韓国語で行われ、学生たちが集中して先生の話の聞こえようとする様子を見ることができた。授業のほか、韓国文化の紹介、韓国の学生との交流会、そして学生たちが直接韓国文化を体験できる時間もあった。

休日には、文化見学で遺跡を見に行き、楽しく学んでいる学生の様子を身近に見ることができた。また、学生と映画を見に行ったり、博物館を見学したりする時間もあった。そのとき見た映画は、1980年の「光州民衆抗争」を素材にした映画であったため、映画を見た後、学生と韓国の歴史について自然に話をするのができて、意味のある時間だったと思う。何より学生たち

には教室の中での授業だけではなく韓国社会の中で、韓国人と接したり、見たりすることすべてが学習であることを実感した。

すべての日程を無事に終え、8月21日日本に戻った。成田空港に着き、みな別れを惜しむような気がした。語学研修の後、参加した学生たちは以前より韓国・韓国文化について一層関心を示しており、学習にも力が入っているように感じられる。

今度の研修で、外国語の授業は学生たちが関心をもち続けるように文化的な面など多様な側面から工夫する必要があることをもう一度確認した。また、このような体験をもっと多くの学生ができることを期待する。

むん ちによん
(本学ランゲージ・センター教育講師)